

木喰の立木仏・子安観音・子安地藏から考える

——石仏の隠した世界——

(石仏のイコノロジー⑫)

春日井 眞英

★地藏について

これまで、東三河から濃尾、南信濃地方で多くの石仏をみてきた。特に石仏が手にする仏具などに注意しながら、儀軌に沿わない存在について眼を向けてきた。ところで『地藏菩薩儀軌』（不空三蔵）によれば地藏は「外に比丘を現じ左の手に宝珠を持し、右の手に錫杖を執持す。」とあり、その姿が一般的な地藏の姿とされている。伊藤古鑑氏は「おそらく鎌倉時代以後になって石仏として左の手に宝珠を持ち、右手に錫杖を持つ姿になったのではなかったか」としている。ここでは地藏にまつわる世界には入らない。だが、地藏の基本的な様式が比丘もしくは声聞形で顕され仏教的色彩に彩られていることを前提にすれば、当然ながら地藏の持ち物、仏具は儀軌に則っている。しかし地藏の持ち物は多様である。『地藏十輪經』には地藏の姿として手の掌中に宝珠を掲げ持ち、『不空罽索經』では左の手に蓮華を持ち右の手をあげ施無畏印を結び、半結跏趺坐の姿で表現されるとある。地藏を考へる上で参考にさせていただいた、伊藤古鑑氏、田中久夫氏、真鍋俊照氏は平安、鎌倉期の地藏を主に取り上げておられる。つまり純粹に仏教的視点に立っておられるのに対して、五来重氏は「石仏や石塔を仏教の經典や儀軌、圖像で説明するのが、従来の石造美術史家の常套

手段であった」とし、従来の仏教美術や石造美術はその形態は説明しただけでも、その信仰内容にまではいることができなかったと指摘し、その原因を庶民信仰やアニミズムなどを未開、野蛮な信仰と賤しむ、格好のいいエリートインテリに、この学問が委されていたからと述べ、庶民信仰の重要性を説くのである。彼はそれまでの常識と食い違ふところが多い理由を常識が背伸びしていたからであり、虚心に見ると庶民のための常識は別のところにあったと言う。この庶民信仰という言葉は説明しにくい。愛知県北設楽郡に限ってみても、日常生活の中に深く根を下ろし、特殊なことは受け取られていない行事などが存在するからである。少なくとも花祭、シカウチの例を考えると、三信遠の霜月祭のように根底に修験儀礼、吉野、諏訪の信仰などと結びついていることが考えられ、庶民信仰の問題は、例えば北設楽の地域が、どの地方と交流があったかを伺い知る手がかりとなるからである。このことは、石仏造営の担い手とされている信州地方の石工達をと彼らを受け入れた太平洋側との社会経済的な流れと人的交流を考える視点を提供してくれる。五来重氏のように庶民信仰と表現するのは容易だが、その庶民の信仰を探ることは困難な問題である。それは集落の中でもひっそりと個人的に行われていたり、地域的に限られた人たちで催される「山の講」、あるいは女性だけに限られていたという「二十三夜待」、また男性だけの「二十二夜待」といった行事にまで及



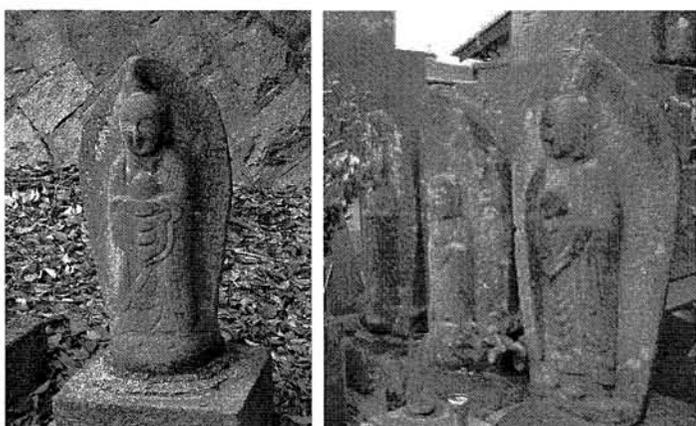
左から ①岐阜県御嵩・愚溪寺 ②岩倉市・光福寺 ③長野県駒ヶ根市・桃源院 ④長野県飯島町・関の地藏。合掌の手の形に注目したい。特に②は衣の意匠にも。

ぶからである。特に「産育習俗」の領域では子供が生まれて三十三日あるいは三十二日目（男の子か、女の子かによって変化する）に行われるお宮参りでの「橋越」の行事は、社会変化に伴って男性が家にいることがすくなくなり、お母さんとその母親だけに受け継がれていて、男性陣が知らなかったという事例もあった。また、二十三夜待（二十二夜待も含む）、庚申講、女講などが存在することは知られているが、その背景については不明なことが多い。ただ、二十三夜待、あるいは二十二夜待の22、あるいは23という数字はキリスト教聖歌（賛美歌）の内容との関係がうかがわせる面もあり、月待塔の分布のありかたに興味を持っている。

★合掌する地藏

筆者が注目している江戸時代中期から後期にかけての地藏や観音などは、一見して仏教的な石像と考えられていて、地域の民俗誌などではただ「地藏」という項目で括られ、地藏の意匠について分類がなされているところはほとんどない。だが、地藏の手の組み方、持つ宝珠の位置などに注目すると地藏の姿は異なり、地藏という項目を細分化する必要がある。

ところによっては將軍地藏、子安様（子安地藏）という分類はなされているが、地藏の多くは、六地藏（これは墓地の入り口あたりにあり、六道で苦しむ亡者を救うという思想の基に彫られている）を除き路端や墓地の中に単体で据えられているものが多く、その姿は多様である。儀軌に従い左手で錫杖、右手に宝珠を持つものから、合掌しているもの（これも、胸前に三角形で手を合わせている（A型）から、Ω型といわれるように腕が平らに伸びて合掌する二形式に分けることができるという。「このことについては吉木豊氏の『志岐島 キリシタン遺跡の若干』長崎県志岐郡芦辺町 平成一四年を参照されたい」。その中でも両手で宝珠を抱く



図⑤名古屋市覚王山 ⑥西尾・常福寺左端のものは宝珠、中ものは三角の布に宝珠、右端のものは赤子を抱くに見える。

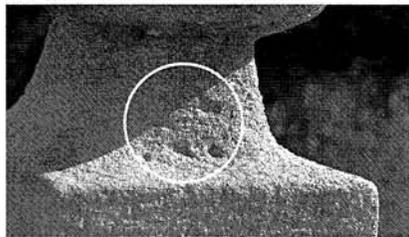
中에서도両手で宝珠を抱く地藏に限ってみても、図⑤、⑥のように抱かれた宝珠が、赤子のように見えるものもある。この他にも地藏が手にする錫杖の頭や、持ち物の形状を検討する必要がある。さらに抱かれる子供も、赤子、幼子に分かれるだけでなく、おっぱいの女子または男の子の場合がある。しかし、このような違いが何に由来しているのかは判らない。このことは地藏信仰の問題を考える上で大変重要と考えているが、そこには五来重氏の考える石像の造立

木喰の立木仏・子安観音・子安地藏から考える

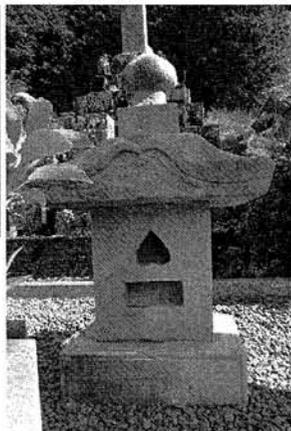
を求める側の意思の問題が関わってくる。

★★★隠された十字架

東三河には隠れキリシタンの存在はなかったといわれている。それは、尾張藩のキリシタン禁制とも絡むかも知れない。時期は異なるが東三河にもキリシタンを受容する素地があったことがうかがえる。レオン・パジェスの『日本切支丹宗門史(下)』、寛永八(1631)年の条(201頁)には三河の千々石、丸山でキリシタンが捕縛された記事があり、松平忠利の日記(元和九(1623)年～寛永九(1633)年)でも「火あぶりにいたし候」でも「とよはしの歴史」豊橋市平成八年(101頁)、という記述が見られる。処刑された人物が土地の者か、他所からの者かは判らないが、キリシタンの存在は否定できなくなる。新城市、井代の法珠院には十字架を刻んだ石塔がある(図11⑦)。このような隠された十字架は、地藏の持つ錫杖や地藏本体に見ることができる。井代と三河大野の間から鳳来寺にむかう道に祀られている地藏の胴体には浅い四つの四角で、十字架が形成している(図11⑧)。このように十字架



図=⑦新城市井代・宝珠院・石塔の宝珠の下に平四つ目で刻まれた十字架がある。(65×30)筆者は、これをキリシタン関係者の墓だと考えている。それは正面の猪目(ハート型)の図形による。



が捕縛された記事があり、寛永八(1631)年の条

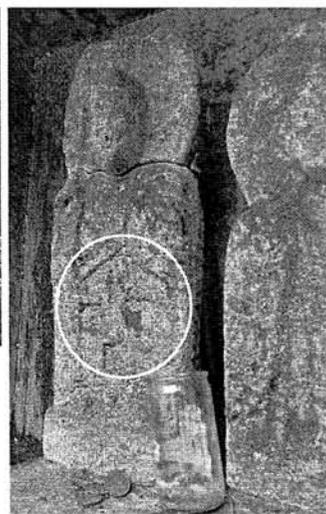


図-⑧鳳来寺道浦田の地藏、胴に十字架

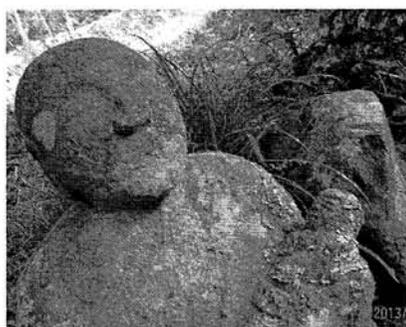
が胴体に彫り込まれて隠されているのは希であり、興味深い。多くの錫杖を持つ地藏では図11⑨、⑩のように、十字架が錫杖の頭に彫られるのである。このように錫杖の頭に十字架を持つてくるのは石工の技術的な問題なのか、それとも願主達の要望によるのかは判らない。だが周辺には仏教的な錫杖も



図=⑨(左)・設楽町豊邦の地藏 図=⑩(右)東栄町長養院参道の地藏。錫杖の頭の部分がH型になっているが、これはイエズスの紋章の十字架と考えられる。



は意図的なものがあったと考へたい。さらに、この北設楽の地域が社会経済的に太平洋側の東海道と山間の中山道をつなぐ地域であったことは別所街道や、恵那から上矢作を経て稲武、田口、足助をつなぐ道があったことはこの地域が経済交流、人的交流の要所であったことを意味しよう。少なくとも図11⑧の石仏が鳳来寺道にあることは重要である。そこは足助から田峯、鳳来寺につながる道であ



図=⑪ 東栄町 月引田の子安地藏

のようであるが、図⑪⑬は幼子であり、手にまりが見受けられる。地藏に抱かれた幼子の髪については、すでに触れた。そこではおっぱいの子供、あるいは鞆を持つ子供を抱く地藏の事例は少ないと見ていたが、見過ごしていたようだ。何よりも子供を抱く地藏の思想的背景を「ルカによる福音書」25〜35に救世主に会うまでは死なないと天使に告げられたというシ

り、さらに豊川水系に結びついていく。図⑨の地藏は設楽町豊邦にある。同じく足助から田峯、鳳来寺への道筋にである。図⑩の地藏は東栄町の下田の長養院のものである。この長養院は明応元年（1492年）に伊豆の韭山より光邦舜玉和尚が移り住み、仏教や文化普及のために盆踊り唄「十六」「のと」などを作って村人に教えたとされる。住職は、後に阿南町瑞光院に移るが、その際、下田の人々が長野県阿南町の新野でも歌い踊ったという。長養院は東栄町の下田は大千瀬川のはとりにあり、天竜川の浦川につながり、そこから佐久間、飯田に通じ、豊根、津具、設楽町にもつながる。このような地域的背景の下で、子抱地藏をどのように見るかが課題となるが、そこには特別な思想性があったと考えている。特に東栄町、月地区 引田の子安地藏（図⑪⑬）の安堵に満ちた老僧の表情は興味深い。しかし、『今昔物語』『日本霊異記』などでは地藏を端正な小僧、あるいは若い僧と記されている事を考えると、この石像は他の（図⑫⑬に見る）子抱地藏に比べても老いて見える。また子供を抱く子安地藏には、赤子、幼子を抱くタイプがある。中には複数の子供が彫られているものもあるが、これは新しいと考えている。ところで図⑫⑬の抱いている子供は赤子のようであるが、図⑪⑬は幼子であり、手にまりが見受けられる。地藏に抱かれた幼子の髪については、すでに触れた。そこではおっぱいの子供、あるいは鞆を持つ子供を抱く地藏の事例は少ないと見ていたが、見過ごしていたようだ。何よりも子供を抱く地藏の思想的背景を「ルカによる福音書」25〜35に救世主に会うまでは死なないと天使に告げられたというシ



図=⑫ 設楽町平山（左）

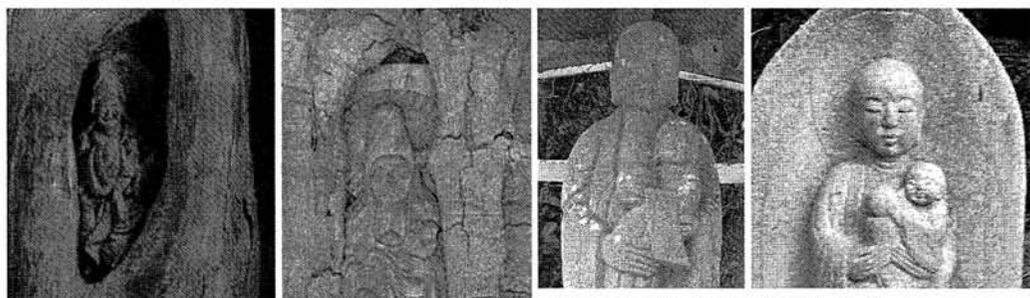


図=⑬ 豊田市足助新盛小守岩（右）

どちらの場合も鞆を手にしている。ただ子安観音にはそのような意匠は見えない。このことは大きな問題かも知れない。マタイ伝ではヨセフがイエスの誕生を寿ぎに来た東方の三賢人に天使から「生命の危機」を告げられ、エジプトに避難し、ヘロデ王が亡くなるまでその地に留まったという。これにはルカの話と微妙に異なるが、エジプトへの逃避への時間的なラグが石像の赤子、幼子という違いで投影されていると考えられる。これまでの石像調査からは、二通りの子供の姿が見えてくる。赤子とは誕生間もないころの姿であり、幼子の時はヘロデ王に追われている時期と考えている。図⑭⑮のような子供供の髪型の違いを仏教的世界に求めてみたが、見いだすことはできない。ただ、「女人変成」（変成男子「へんじょうなんし」は、古来、女子（女性）は成仏することが難しく、いったん男子（男性）に成ることで、成仏ができるとした）の思想はあるが、これが江戸時代の石仏の中に突如

メオンの話^{註⑩}に子安地藏を重ねても違和感はない。同様に仏教でも釈迦が誕生したとき、王宮に言祝ぎに訪れたアシタ仙人が王子を見て泣いたのを、シヤカ族の王、シュッドーナが涙のわけを尋ねると「御子は、悟りを開き尊い教えを語られますが、私はそのときまで承えられません。それが悲しいのです」と語ったという^{註⑪}。

子安地藏は子抱地藏というべきかもしれない。その意匠には赤子の場合と幼子の二通りがあると、既に述べた。しかも幼子の髪型が、おっぱいのものと坊主頭の二通りがあり、



図一⑩木喰・立木仏（子安観音）光明寺・愛媛県四国

中央市中之庄町72cm 制作年は寛成11(1799)年二月二八日とある(左)。図二⑪(右)木喰による立木の子安観音。兵庫県猪名川町・東光寺・文化四卯歳七月と推定。

図二⑭豊田市大沼・同樹寺(左)

図二⑮名古屋市覚王山日泰寺(右)

出現したと見るのは無理がある。しかしキリスト誕生にまつわる預言をシメオンがマリアに伝えている。預言には「マリアの七つの悲しみ」、「エジプトへの逃避」の話がある。一説ではヘロデ王のイエス抹殺の話はヨセフが夢の中で天使から聞き、エジプトへの逃避行を決めたところ、ヘロデ王の魔の手から逃れるため女子に扮装させると言う工夫が髪を伸ばし、振り袖を着せることで見立てられるのであるが、木喰は子安観音を立木仏、樹の洞のなかに造り込むことによって、追っ手を避けるマリアに重ねて行く。このような視野で子供を抱くマリアが子安観音に重なり、ルカやマタイによる聖書の世界が石仏などに浮かび上がるのである。つまり、福音書の世界が聖書の話を知っている者の脳内に立体的に展開してくる。このことは服部幸雄氏が言う

「いったんは眼を通して感覚的に受け止められ

たものを、いちど頭脳の知的な働きへと誘い込み、ふたたび感覚の世界へと突き返すという、屈折した鑑賞法を要求してくる」
ことになり、
「見立てるものと見立てられるものが二重写しになる」
ことでもある。

同じように近世文学研究者の中村幸彦氏は

「見立ての微妙は一見似ていない或いは似ていないと、普通には思われるものに、類似を発見することにかかっている。(中略)その類似点を巧みに抑えて、二者の連絡を確かに保ちさえすれば、その点を除いた他の部分は、できるだけ相違していた方が面白いという」
木喰の立木仏は単なる子安観音ではなく迫害を逃れようとしている者を立体的に見立ての世界に出現させたのである。この見立ては受け入れられてもらえると考えている。また子供を抱く女人の表情に憂いを見られるならば造仏者の思いの深さを読めるかも知れない。



図三⑬極楽寺・山口県防府市岩島・寛政11年(1799)幼子の手にしているものが問題。

★★★木喰の子安観音、子安地藏を考える

木喰の立木仏についての事例は『生誕』一九〇年 木喰展——庶民の

信仰・微笑仏』（以後『木喰展』と略記する）^(註10)によれば九例が確認されているが、子安観音、子安地藏は三例である。以下に引用しておく。

- (一) 薬師如来(権) 寛政十(1798)年 願行寺・山口県萩 市福井 榎屋
- (二) 釈迦如来(松) 寛政十年 山口県萩市中小川(友信公 会堂)
- (三) 地藏菩薩(楠) 寛政十年頃 山口県山口市大内御堀
- (四) 観音菩薩(銀杏) 寛政十一年頃 観音堂・山口県防府市 桑山
- (五) 子安観音(榎) 寛政十一年 光明寺・愛媛県四国中央 市中之庄光明
- (六) 観音菩薩(梨) 文化元(1804)年 真福寺・新潟県長岡市小国町
- (七) 子安地藏(銀杏) 文化二年 大泉寺・新潟県柏崎市大清水町
- (八) 観音菩薩(梅) 文化二年 個人(旧蔵)・新潟県柏崎市野田
- (九) 子安観音(樺) 文化四(1808)年 東光寺 兵庫県猪名川町

これによると立木は一定しない。また寛政から文化年間(1798~1807)にかけて造られたことは木喰の第一期の末から第二期の末のものである。ただ、九番目の兵庫県猪名川町・東光寺の子安観音は見方は第三期のものと言える。それは木喰がなくなる文化七年の三年前の仏像だからである。資料によって出生時期に違いがあるが示されたのは八十三歳とも九十三歳であったとも言われるが、立木仏は第二期に集中している。現在これらの立木仏で樹木本体の中にあるのが、(一)の薬師、(三) 地藏、(四) 観音菩薩であり、他は樹木から切り離されているが、元々は、立木のままであった。地藏菩薩、観音菩薩が立木に彫られていたことには、追っ手達から逃れて暮らしていた人々への共感も秘められていたと考えられる。このことは、彼の和歌の「白蓮華」と「白百合」(聖母を象徴する)の白を介してキリスト教に通底して

木喰の立木仏・子安観音・子安地藏から考える

いく。木喰の目には幕府の御禁制という迫害で逃げる人々と、ヘロデ王を逃れてエジプトに向かうイエス親子の姿だけではなく、図11に見る瓢箪から洗礼者ヨハネの姿を見立てていたとも考えられる。聖ヨハネも誕生後ほどなく、ヘロデ王に殺されるところだった。幾人もの兵士らに追われる母子が、天から「神の山よ、開いて、この母と子を迎え入れよ」と言う声で、山は二人を飲み込んで閉じたという。この石の見える。話はギリシア正教の外典とつながる。前記の石の見える堂が、愛知県岡崎市の真福寺の本堂前にある十字架の浮彫りである。真福寺の本堂前には、大岩がヨハネ達を救った山に見立てられていたか



図14 岡崎真福寺本堂前に見える石の見える堂が、愛知県岡崎市の真福寺の本堂前にある十字架の浮彫りである。真福寺の本堂前には、大岩がヨハネ達を救った山に見立てられていたか



図15 真福寺・維摩居士? 台座に十字架

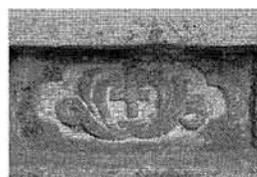


図16 真福寺・維摩居士? 台座に十字架

ではこの岩の由来は判らないと聞いたが、この岩には大きな意味が秘められていたであろうが、資料はない。またこの岩に関連するのは判らないが、真福寺に納められている古い仏像の台座(図15)に十字架がある。真福寺は、地勢的に矢作川から作手に抜ける道筋に位置し、作手からは、別所街道で豊根方面に、あるいは田口(設楽町)を経て上矢作、中山道の大井(恵那)へつながる。ついでながら、この本堂の裏手にはキリシタン灯籠があった。

木喰が子安地藏、子安観音を造立したからといって、彼をキリシタンというつもりはない。ただ全国巡錫中にキリシタンの話を耳にした可

木喰の立木仏・子安観音・子安地藏から考える

能性は否定できない。それは彼の巡錫地から考えられる。筆者は見立
てという視野から子安地藏、子安観音をキリスト教のシメオンや、マ
リアに見立てることができると可能性を指摘し、その微妙な表情に諸々
の状況、背景を考えている。深読みと言われるかも知れないが石仏の
表情は石工の技量だけではなく彼の信仰の度合いにも関わると考えて
いる。だが石工の名前が判明できるものは少ない。

ところで木喰の和歌の一首が天明元(1781)年七月七日の日付と
もに仏像の背面に記されているが、それは、初めて佐渡に渡ったとき
のものであるという。^(注10)

皆人の心に咲きし白蓮花^{びやくれんげ}はちりても種はのこらむ

この白蓮華は仏教用語であるが、「一粒の麦」と同じく無数の実を結
ぶと説いたキリストの言葉(「ヨハネ伝」第12章)に通底すると考え
たい。彼の和歌には阿字観、白蓮華などの仏教語が多用されているが、
今後の課題としたい。とくにこの和歌は天明元(1781)年(64歳)に、
佐渡に渡ったときのものであるが、佐渡にはキリシタンの痕跡がある。^(注11)
註119の(B)『新潟県キリスト教史上巻』より青山玄^(注12)氏の記述を引用
してみる。

平安末以来、佐渡は砂金の産地として知られた。

1586年 豊臣秀吉は上杉景勝に鉱山支配を命令後、相川金銀山開発。

1607年 徳川家康が佐渡を直轄地とし、大久保長安を奉行に命令。

徳川家康はフランシスコ会士 ジェロニモ・デ・ジェズースを通じ

て採鉱術の導入を図る。

従来の灰吹精錬法に代わり、「水銀ながし」が短期間行われた。

江戸幕府のキリシタン迫害が始まると、炭鉱夫として地下に潜伏す

る信者が増加。

1650年以來、イエズス会士アンジェリス・G・アダミ、そして日本
人神父結城デイエゴが佐渡を訪問。

つまり、木喰を佐渡に駆り立てた理由が伺えるのである。だが蝦夷、
佐渡のキリシタンと木喰の巡錫の間には百年ほどの開きがある。

★★★木喰の「日本廻国修行」の背景

さて、幼いイエス達が追っ手から身を隠したのは洞窟、あるいは樹
の洞であったろう。そのためか穴観音、岩屋草という事例は存在する。
ヘロデ王に追われる聖母子の逃避行を宣教師がどのように語り、伝え
たのかは判らない。だが、放浪する造仏師がこの話に刺激されたので
はなかったか(図10、11)。そして木喰作の子安観音像は二十一
体であり、その創作期間が佐渡、日向、長崎を経て身延にもどるまでの
第二期の後半であることは興味深い。

子安観音は

【第一期(安永二(1773)年〜寛政五(1793)年の「木喰行道」の時
代】に1体、

【第二期(寛政五(1793)〜文化三年(1806)年の「木喰五行菩薩」の
時代】に18体、

【第三期文化三(1806)年〜文化七(1810)年の「木喰明満仙人」の時
代】に2体。

そして子安地藏は17体彫られ、

【第一期「木喰行道」の時代】に13体、

【第二期「木喰五行菩薩」の時代】には4体。だが

【第三期の晩年期】のものはない。つまり、この第一期、二期は
「木喰」が、シメオンに関心を持った時期、聖母子に関心を持った時

期とも言える。小島梯次は木喰の神仏像を仏教系、神道系、その他に分類し、総数717体としている。その中で、仏教系は【第一期(木食行道)】89体、【第二期(木喰五行菩薩)】480体、【第三期(木喰明満仙人)】40体、不詳2体と分類している。ここで注目すべきは

子安観音は【第一期】1体、【第二期】に18体、【第三期】は2体。
子安地藏は【第一期】に13体、【第二期】4体、【第三期】はないことである。

以上簡単に木喰の巡錫と作仏について触れて来たが、この期別の分類は(註⑦)『木喰』大久保憲次の「略年譜」に因る。

木喰は甲斐国東河内領古関丸畑(現山梨県南巨摩郡見延町古関丸畑の伊藤六兵衛の次男に生まれる。出生には享保三(1718)年の説と享保十三(1728)年の二説があるが、享保三年説にならう。享保十六(1731)年一四歳の時に、江戸に出奔。一二歳の時に相州大山不動に参詣、古義真言宗の僧に誘われ得度、四五歳の時日本廻国修業を発心する。常陸国羅漢寺の観海上人の弟子となり、木喰戒を受け、「三界無庵無仏 木食行道」の僧名を受ける。木喰が造仏に関わった時期が三つに分けられているのは、その僧名に従ってのことである。

【第一期】は、△木食行道▽として安永二年(五六歳)廻国修行を志し、安永七(1778)年弟子の白道とともに蝦夷地へ赴くが北海道の松前藩では寛永十六(1639)年天草の乱を契機として106人のキリシタンが処刑されている。ただ彼らは松前の人間ではなく金堀人夫とされている。木喰達は松前から離れた江刺の門昌庵で過ごす¹¹⁰が、安永九年五月、疱瘡の流行のため蝦夷を離れる事をやむなくされる。九月に野州栃窪(栃木県鹿沼市)の徳性院に止錫し、白道とともに薬師三尊と十二神将を刻むが小島梯次氏によるとまだ木食らしさはないという。天明元(1781)年(六四歳)木喰は信州長久保で白道と別れたという。

木喰の立木仏・子安観音・子安地藏から考える

この地は中山道の宿場町で、上田、佐久、松本市、そして諏訪市の間にある。ここから木喰は佐渡に渡り、四年留まるのだが、白道と別れた理由はわからない。だが、佐渡にキリシタンの痕跡があったことはすでに述べた。しかし木喰と佐渡のキリシタンとは百年以上の差がある。このことは木喰本人よりも弟子の白道の方にキリシタンの要素を求めるべきかも知れない。だが白道なしでも木喰は佐渡で九品堂を建立するなど活発に、活動している。

天明五(1788)年に建立した九品堂を仏弟子丹海に託し、木喰は佐渡を去る。その後天明八(1788)年七二歳で九州、日向の国分寺で約十年住職を務めることになる。その間に国分寺(寛政三年)が炎上し、木喰は、伽藍、本尊再興に奔命し、寛政六(1794)年堂宇、本尊を再興し寛政九(1797)年、住職を辞し、さらなる廻国修業にでる。この国分寺でのポイントは【天一自在法門 木喰五行菩薩】(寛政五年)と名乗ることであり、これによって木喰の【第二期】に入る。

くりかえすが木喰の作仏の【第一期】は観海上人より、木喰戒を受け「三界無庵無仏 木食行道」の僧名の下で、安永二年から寛政五年までの二十年間の活動期間である。【第二期】を筆者は国分寺の住職を辞した寛政九(1797)年(八十歳)以後、としたいのだが寛政五年の【天一自在法門 木喰五行菩薩】と名乗ったことに木喰自身の生き方が変化しただけという意味があると理解したい。つまり、「寛政五年」の、この名告りによって木喰の【第二期】が始まるが、僧名の変更は木喰の内面的変化であり、無視できない。寛政五年から九年までの間には木喰は長崎に赴くが、長崎で何があったのか、またそのことが二度目の佐渡とどのように結びつくのかが不明である。ただ、木喰を長崎にむかわせたのは佐渡のキリシタンの問題と関係があったと考えたい。ここに白道が絡むかは今後の課題である。木喰は国分寺を辞して、

木喰の立木仏・子安観音・子安地藏から考える

寛政十年に萩の福栄村の願行寺（山口県萩市福井榎屋）で初めて立木仏（葉師如来）を刻んでいる。蝦夷地で弟子の白道とともに作仏を始めたとされ、長いこと北海道（海部郡八雲町豊岩、門昌寺の子安様（図11））が木喰の処女作とされていたが、その子安様が弟子の白道のもの（図16）が指摘がなされている。筆者はこの子安様の顔面に十字架が彫られていると考えている。それは奥三河、中山道などの各地の石仏と比較した結果（図11、17、18）である。さらに、白道の出身地が塩山市（甲府市）萩原上原（前掲書164頁 大久保憲次）とされていることから白道の家系が気になる。木喰は白道とともに巡錫し師弟逆転し、白道を通してキリスト教に接近し、彼の造仏の技術に触れることで造仏師の道をたどったのであろう。木喰の造立したものは根本的には仏教か



判らぬ。知れないが、神道系その他も多
い。彼の造立した子安地藏が【第
一期】に集中し、【第二期】に
白道様。は子安観音に集中していること
は興味深い。子安観音は仏教で
は捉えきれない世界である。寛
政十二年（1800）年、八三歳で故郷に戻った木喰は村人の願いで四国八
十八体仏を造立し、そこに納める四国堂も完成させ享和二年（1809）年
十二月に八五歳の身で、佐渡に渡るべく越後にむかう。しかし、地震
のために小木湊が壊れ、その修復を待って越後の各地で造仏するが叶
わず、諏訪を経て仁和寺の称俊宮に謁見するべく上洛するも、宮の病
で謁見は出来ず、病氣回復を願って丹波の清源寺で十六羅漢像を刻ん
だという。その間に、夢で弥陀三尊から「神通光明明満仙人」と号せ
よと言われ、六百歳の延寿が授けられたと言ふ。【第三期】は木喰明
満と号した時代でになり八九歳からのことになる。文化四年の三月に
北摂、猪名川に巡錫し、子安観音（樺）を文化四（1803）年 東光寺
兵庫県猪名川町の東光寺で刻んでいる。だが、文化七年（1810）九三

歳で示寂するが、木喰の終焉地は不明である。この第二期から第三期にかけて彫られた立木の子安観音・地藏は以下の三体である。



図17 設楽町清崎沙門堂の観音 図18 駒ヶ根桃源院の地藏 木彫と石像の違いはあるが図16の顔面に注意。

子安観音（樺） 寛政十一年
光明寺・愛媛県四国中央市
中之庄光明
子安地藏（銀杏） 文化二年
大泉寺・新潟県柏崎市大清
水町
子安観音（樺） 文化四（1803）
年 東光寺 兵庫県猪名川
町

この文化四年の兵庫県猪名川町 東光寺のものが【第三期】になる。木喰はそれまでも、木喰は子安観音を造立しているが、晩年にかけて立木に子安観音等を造立する背景には、彼の内面的な変化があったことがうかがわれる。また、子安観音像の幼子が手にしているものは不明とされているが、女の子に擬していると見れば鞠と考えたい。『木喰』（前掲書204頁）によると子安観音像は全国各地で21体になり、子安地藏は17体が木喰行道（第一期）のもので、北海道に11体、佐渡に2体が確認でき、木喰五行の時代のもものは4体がある。そして子安観音は木喰行道では1体、木喰五行期では18体になり時代とともに彫る対象が変わって来ている。この子安地藏であるが寛政十二年三月二四日の署名を持つ浜松市方広寺のものと、同年六月二日の蓮華寺のものは日付が近いにも関わらず蓮華寺の造仏では瓢箪（図19）を子供が手にしている。『木喰』所収の図19、20、25、32、34、21は立木仏（は鞠に見える）。ただ子安観音像の表情は地藏（子安様、あるいは

は子抱地蔵」と比較すると、愁いが見え、表情に微妙な違いがある。このことは木喰が福音書の（マリアの七つの苦しみ）、マタイ伝（ヘロデ王による幼児殺し）のことを理解していたからと考えたい。

★★★★★木喰に見る象徴性と見立て

木喰に限らず、鞆を持つ幼子を抱く子安観音がいつ頃から頭れるのかは、今後の課題であり、仏像の手にする道具の検討が必要であろう。ところで、木喰が立木に子安観音、子安地蔵を意図的に刻んだとすれば、そこには、信仰を持ったものにしか読み取れない見立ての世界があると指摘した。それは立木に紛れながら追っ手から逃げるマリアの姿であり、追うヘロデ王が想起されるからである。木喰は、「日本廻国修行」を四五歳の宝暦二（1762）年に志し、五六歳（安永二年）に立出する。そこには十一年の準備期間がある。白道の名前が出てくるのは安永七（1779）年に蝦夷地に渡る時であり、立出してから蝦夷地に至るまで五年が経っている。二人の出会い、この蝦夷地に向かう途上でのことと伺わせる（前掲書『木喰』大久保憲次編「略年譜」218頁）、二人は天明元年（一八四〇）に、信州の長久保で別れるまでの三年間同道するが、白道は佐渡には渡っていない。木喰は、佐渡に四年逗留し、九州に向かうが、何が彼を九州に向かわせたのかは判らない。すでに触れたが佐渡にはキリシタンがいた。

木喰の立木仏・子安観音・子安地蔵から考える



図19『木喰』（42頁）所収26図、幼子の手にするのは瓢に見える。受洗を暗示するものか？（蓮華寺）

造仏を通して木喰の「日本廻国修行」を俯瞰してみると彼はキリシタンとの出会いを求めて行動していたように考えられる。各地に納められている仏像は木喰の一方的な押しつけではなかったことは、仏像の多様さから考えられる。どのような像を刻むかは、人々とのふれあいから定まったものではなかったろうか。そのような人々の中にキリシタンがいたとしても不思議ではない。彼らとの触れあい、木喰の宗教的理解の深さが第一期のシメオン（子安様）、第二期の立木仏の子安観音に現れていると考えている。

愛知県内の木喰仏は四体と少ない（前掲書『木喰』178頁「木喰の作品小島梯次」）。年代的にキリシタン探索は尾張では緩くなっていたかも知れないが、尾張部での造立が少なかった背景にキリシタンと疑われることを避けるためだったのかも知れない。

筆者はこれまで地蔵や、観音の石像が手にする仏具に仏教的でないものがあると指摘してきたが、それは石工の腕に因るなどの意見を聞いて来た。だが、石仏の資料が増えるに伴って気になる事例も増えた。その中には織部灯籠（キリシタン灯籠とも呼ばれる）の問題もある。キリシタン禁制との関わりで密かに屋敷外に搬出され、神社や寺院に持ち込まれている。尾張藩でのキリシタン取り締まりは緩やかだったとされている。しかし、寛文元（1661）年から寛文七（1667）年の美濃崩れの弾圧で尾張のキリシタンは壊滅したことになる。だが、寛文七年に根絶されたはずのキリシタンが40年以上を経た、正徳元（1711）年に700名余が捕縛（『尾張と美濃のキリシタン』295頁）されたことを見ても、キリシタンは深く根を張っていた事になる。つまり、名古屋から拡散し各地に根ざして行ったキリシタンの標識をもった道祖神などが民俗的な信仰の中に紛れ混んでいったと考えている。新城市の四谷、東栄町振草の双体仏などは道祖神に分類されているが、その周囲にはキリシタンの痕跡を有した石造があることを見逃してはい

木喰の立木仏・子安観音・子安地藏から考える

けない。地藏や、観音像から隠れキリシタンの問題が、このような展開を見せてくれるとは全く予期していなかったが、石像は仏教的な儀軌をまといながらもキリスト教的な痕跡を見せてくれているのである。

註

註① 伊藤古鑑 『お地藏さま』春秋社2000 (1972初版) 84頁。

註② 前掲書 83頁。

註③ 前掲書 86頁の『地藏十輪經』では両手の掌中に宝珠をかかえ持ち、『不空罽索經』では左の手に蓮華を、右の手をあげて施無畏印を結び、半結跏趺坐など經典、宗派により異なっている。

註④ 伊藤古鑑 『お地藏さま』春秋社2000 (1972初版)。田中久夫 『地藏信仰と民俗』岩田書院 1999 (初版1995)。真鍋俊照 『密教図像と儀軌研究(下)』宝蔵館2001

註⑤ 五来重 『石の宗教』角川選書15 角川書店 昭和63年。31頁

註⑥ 拙論(イ) 拙論「橋渡りの儀」：愛知県北設楽郡に残る八産育習俗について」 社会科学研究19巻1号 中京大学 1998。(ロ) 「橋渡りの儀(その2)」：愛知県北設楽郡およびその周辺に残る八産育習俗について」 社会科学研究19巻2号 中京大学 1999。(ハ) 「産育習俗資料」研究紀要 7号東海学園大学 2002。(ニ) 「産育習俗資料(その2)」：愛知県の文献資料を基に」東海学園大学研究紀要 第8号(分冊2) 2003。(ホ) 「産育習俗・報告」お産の前後・1993年度福祉大学生たちによる聞き取りより 東海学園大学研究紀要 第9号(分冊2) 2004。

註⑦ 拙論「石仏幻想の路——三信遠にキリシタン文化を探して——」『言語・文学・文化』第14号(通巻73号) 東海学園大学 2014

「石の仏に見る隠された顔——見立てという視点から考える——(石仏のイコノロジー⑩)」『言語・文学・文化』第十八号(通巻七十七号) 東海学園平成31年。

註⑧ 前掲書「石の仏に見る隠された顔——見立てという視点から考える——(石仏のイコノロジー⑩)」『言語・文学・文化』第十八号(通巻七十七号) 東海学園平成31年

註⑨ 幼子を抱き喜ぶ老人の姿は、ルカによる福音書02・22〜35参照 『Eugラッドック宮本あかり訳』現代聖書注解 ルカによる福音書』日本キリスト教団出版局2007 (1971)

註⑩ 『スタタニパータ』第679〜686 『仏典をよむ 1 ブッダの生涯』中村元 岩波書店 (2001初版) 2004 5〜10頁

註⑪ 註⑨と同じ幼子を抱き喜ぶ老人の姿は、ルカによる福音書02・22〜35参照 『Eugラッドック宮本あかり訳』現代聖書注解 ルカによる福音書』日本キリスト教団出版局2007 (1971)

註⑫ 拙論 前掲書「石の仏に見る隠された顔——見立てという視点から考える——(石仏のイコノロジー⑩)」『言語・文学・文化』第十八号(通巻七十七号) 東海学園大学)

註⑬ 拙論 前掲書

註⑭ 『生誕二九〇年 木喰展——庶民の信仰・微笑仏——』図録』神戸新聞社2007 図21 36頁。この子安観音は寛成11 (1759) 年二月二十八日とある。図録にはもともと立木仏であり、境内の横に彫りつけられていたと言う。柳宗悦が発見したとき、すでに切られていたと記されているから大正以前と知れるが、表皮がかなり巻き込まれており、随分長い間立木のままであったことが想定される。他に第四期 神通光明——木喰明満仙人の項 107頁にも立木子安観音

(兵庫県猪名川町 東光寺)

註⑮ 前掲書 図20。作品解説では「木喰のすべての子安観音像に共通する疑問であるが子供の持っているものは一体何であろうか。と

記されている・前掲書 204頁

註⑩ エミール・マール、田辺保 訳 『キリストの聖なる伴侶たち』みすず書房 1991 13頁 ギリシア正教会の外典によると、聖ヨハネは誕生後ほどなく、非常な危険にさらされたと伝える。ヘロデ王の命によって、他の男の子らとともに殺されるところだった(マタイ 2・16(18参照))が、奇跡によって、すんでのところまで救われた。幾人もの兵士らが、子供を連れて逃げる母親の後を追ひ、もう少しでつかまりそうになった。なにしろ、目の前に高い山が立ちはだかっていたからである。そのとき突然、天から声がして、このように言った。「神の山よ、開いてこの、この母と子を迎え入れよ」と。山は口をひらき、聖エリザベツと聖ヨハネとを飲み込んで閉じた。

註⑪ 拙論。前掲書。

註⑫ 前掲書『木喰』 182頁。荻原光之「こころのうたびと——和歌から見た木喰さん——」

註⑬ (A)『日本キリスト教歴史大事典』日本キリスト教歴史大事典編纂委員会 教文館 1988 「佐渡」の項 576頁。(B)青山玄「越後におけるキリシタンの潜伏と迫害」『新潟県キリスト教史』上巻(新潟日報事業社出版部) 1993。(C)レオン・パジェスの『日本切支丹宗門史』(上)岩波書店(昭和十三年)には慶長九(1604)年伏見のキリシタンが佐渡の鉾山で1年半滞在し、数名のキリシタンの信仰を固めたとあり、ジュリアス・アダミの佐渡訪問も記されている。

註⑭ 「越後におけるキリシタンの潜伏と迫害」『新潟県キリスト教史』上巻(註⑬の(B))

註⑮ 村井早苗「日本史リブレット37」『キリシタン禁制と民衆の宗教』山川出版社 2002、28頁。

註⑯ 前掲書 『生誕一九〇年 木喰展——庶民の信仰・微笑仏——』神戸新聞社2007 大久保憲次 「木喰学序説——木喰さんが深い仏縁を契った地を巡る」164頁、にはそれまで木喰の処女作とされて

木喰の立木仏・子安観音・子安地藏から考える

いた子安様に白道の銘があることが記されている(前掲書178頁)。木喰が白道を伴って蝦夷地に渡ったのは安永七年(1778)この白道は宝暦5年の出生とされ、五一歳の木喰に対し二四歳であった。二人は蝦夷地に二年滞りし三十体ほどの仏像を刻み、安永九年に疱瘡の流行から逃れるように蝦夷地を後にしたという。図⑩は木立光俊『風と菩薩の物語』私家版平成三年。

註⑰ 横山住雄『尾張と美濃のキリシタン』中日出版社 昭和54年 295頁

五野井隆史『日本キリスト教史』吉川弘文館 平成5年(平成2年)240頁では、尾張藩では正保元(1644)年キリシタン改めによって48名が捕縛され江戸送りになったが、それ以後寛文元(1661)年の濃尾崩れまでは検挙はなかった。寛文七(1668)年までの7年の間に1300名余が検挙されたが寛文七年には尾張ではキリシタンが根絶されたとの報告がなされている。だが、横山に因れば正徳元(1711)年700名余が捕縛されている(295頁)。

註⑱ 前掲書 横山住雄『尾張と美濃のキリシタン』中日出版社 昭和54年